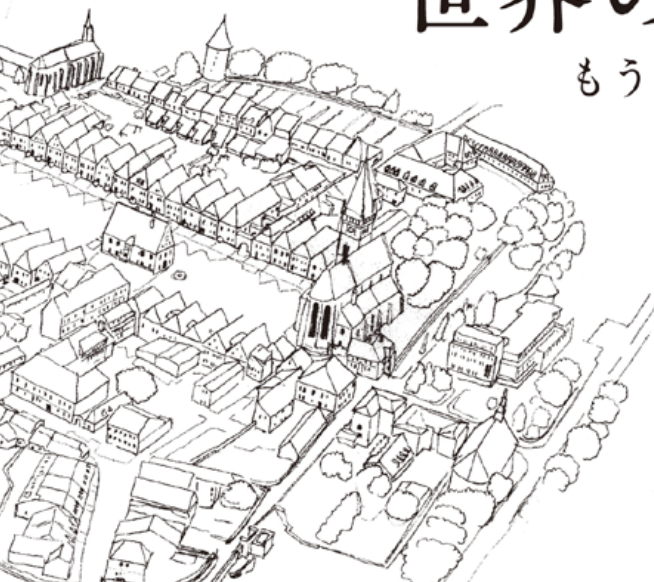


芦川智 編 芦川智・金子友美・鶴田佳子・高木亜紀子 著

世界の広場への旅

もうひとつの広場論

彰国社



芦川智 編 芦川智・金子友美・鶴田佳子・高木亜紀子 著

世界の広場への旅

もうひとつの広場論

はじめに

海外都市広場調査を本格的に始めたのは1990年である。それより以前の海外調査は1972年であり、今から44年前のことで、まだ世界は冷戦時代であった。海外、特に東欧で、調査を実施するのはなかなかできる状況ではなかったが、1990年になるとベルリンの壁が壊れて一挙に東欧の民主化が進み、ソビエト連邦が崩壊していき、東欧の調査を企画できるようになった。それでも全行程レンタカーで踏破することに、ためらいがあったのは確かであるが、行程を最初に決めていくことは臨機応変な判断ができなくなるという恐れから、車での調査を決断した。最初の東欧調査で踏破した距離は8,028kmである。海外都市広場調査の総走行距離は71,354kmに及び、この機動力が調査の成果に如実に反映されたと思っている。

四半世紀の間に調査用具も変化していった。まず、銀塩カメラからデジタルカメラへの転換である。さらに距離計の発達である。当初は精度が上がらない機器で苦労しながらの測定であった。今ではレーザー距離計が普通になり、かなりの精度が出せる機器が開発されている。また、衛星画像が活用できるようになったこともフィールド調査を容易にしていた大きな要素であろう。

世界はこの26年間で大きく変わった。その中で大きな事象

は情報のグローバル化であり、科学技術の躍進とともに、情報がどこでも確保できる時代となったことが人々の生活が大きく変えたことになる。つまり、世界の各地で起こっていることを日常のお茶の間で確認できるようになったことが生活を変えていった要因のひとつであろう。現代の世界では多くの戦争が今なお続いている。テロや民族紛争による抗争はいつ止むともしれない状況である。これまでに調査を行うことができた国が、今はもう入国さえままならないという状況にあることは悲しむべきことである。

この本で取り扱った国は19カ国で、紹介された都市は69である。これに対して、今までに調査した国の数は延べ86カ国で広場の数は都市広場調査だけで1,059である。このように、調査の内容のほんの一部ではあるが、シリーズ研究として長年行ってきた研究の成果をこの1冊に集約したことは確かである。広場を対象とする研究者に対して、もうひとつの広場論を提供する書籍として、あるいは世界の広場を訪ねていく旅行者にとってのガイドブックとして、本書が役立つことを願っている。

目次

はじめに 003

1 広場への導入 006

ドゥオーモ広場:ミラノ／イタリア 008

ドゥオーモ広場:フィレンツェ／イタリア 010

サン・マルコ広場:ヴェネツィア／イタリア 012

2 建物のための広場と人のための広場 014

旧市場広場:ポズナニ／ポーランド 016

旧市場広場:ヴロツワフ／ポーランド 018

中央市場広場:クラクフ／ポーランド 020

3 マルクトと称する広場形態 022

マルクト:マインツ／ドイツ 024

マルクト:ライプツィヒ／ドイツ 026

中央市場通り:ミュンスター／ドイツ 028

マルクト:アーヘン／ドイツ 030

4 スペイン特有のマヨール広場 032

マヨール広場:マドリード／スペイン 034

マヨール広場:サラマンカ／スペイン 036

マヨール広場:セゴビア／スペイン 038

5 イスラーム都市旧市街の広場概念 040

市場広場:ガルダイア／アリジェリア 042

旧市街:チュニス／チュニジア 044

メスキータ:コルドバ／スペイン 046

6 スイスのツェーリンゲン家の都市づくり 048

マルクト通り、がらくた通り、正義の女神通り:ベルン／スイス 050

中央通り:ムルテン／スイス 052

市庁舎広場、中央通り:トゥーン／スイス 054

中央通り、マルクト広場、ゲルツェルン通り:

ゾロトゥルン／スイス 056

7 イギリスの広場概念 058

ハイ・ストリート:コルチェスター／イギリス 060

コヴェント・ガーデン:ロンドン／イギリス 062

ピカデリー・サーカス:ロンドン／イギリス 064

フィッツロイ・スクエア:ロンドン／イギリス 066

8 スロバキアの街路型広場 068

市庁舎広場:スピシュスカー・ノヴァー・ヴェス／スロバキア 070

市庁舎前広場:バルデヨフ／スロバキア 072

ミエロポ広場:レポチャ／スロバキア 074

9 各地の街路型広場 076

マクシミリアン通り、市庁舎広場:アウグスブルク／ドイツ 078

ブロード・ストリート:スターリング／イギリス(スコットランド) 080

ドゥーギ広場、ドゥーガ通り:グダニスク／ポーランド 082

10 わが国の広場概念 084

金刀比羅宮参道空間:琴平／日本 086

階段の町:尾道／日本 088

仲見世・浅草寺境内:浅草／日本 090

谷中銀座商店街、夕焼けだんだん:谷中／日本 092

11 バリ島の広場概念 094

帯状広場:トゥングナン／バリ島・インドネシア 096

帯状広場:プグプグ／バリ島・インドネシア 098

12 特殊地形:坂・段差・階段 100

三位一体広場:バンスカ・シュティアフニツァ／スロバキア 102

サンタ・マリア・デル・モンテの階段、ラ・ピアッジア通り:

カルタジローネ、コリナルド／イタリア 104

石段街:伊香保／日本 106

ダシャーシュヴァメーダ・ガート:ヴァーラーナシー／インド 108

13 ネパール、チベット(西藏)の広場概念 110

バルコル、サムイエ寺:ラサ／チベット 112

ダルパール広場、ボダナート:カトマンドゥ／ネパール 114

ダルパール広場:パタン／ネパール 116

ダルパール広場、トゥマディ広場:バクタプール／ネパール 118

14 祭りと広場 120

山あげ祭り:那須烏山／日本 122

カンポ広場、ドゥオーモ広場:シエナ／イタリア 124

アム・マルクト:シュヴェービッシェ・ハル／ドイツ 126

三社祭:浅草／日本 128

15 開かれた広場・閉じられた広場 130

コメルシオ広場:リスボン／ポルトガル 132

4月9日広場:タオルミーナ／イタリア 134

シニョリーア広場:グッピオ／イタリア 136

ポポロ大通り:キオッジア／イタリア 138

16 水面と広場 140

旧港:マルセイユ／フランス 142

水路:麗江、水郷古鎮、ヴェネツィア 144

プラツァ通り:ドゥブロヴニク／クロアチア 146

水上マーケット:ダムヌン・サドゥアック、アンパワー／タイ 148

17 転用された広場 150

ナヴォーナ広場:ローマ／イタリア 152

アンフィテアトロ広場:ルッカ／イタリア 154

プラート・デッラ・ヴァッレ:パドヴァ／イタリア 156

ヴァーツラフ広場:プラハ／チェコ 158

18 連携された広場 160

ホルニー広場、ドルニー広場:オロモウツ／チェコ 162

フルッタ広場、エルベ広場、シニョーリ広場:

パドヴァ／イタリア 164

チステルナ広場、ドゥオーモ広場:

サン・ジミニャーノ／イタリア 166

フローテ・マルクト、小さな手袋マルクト、グリーンプラーツ:

アントワープ／ベルギー 168

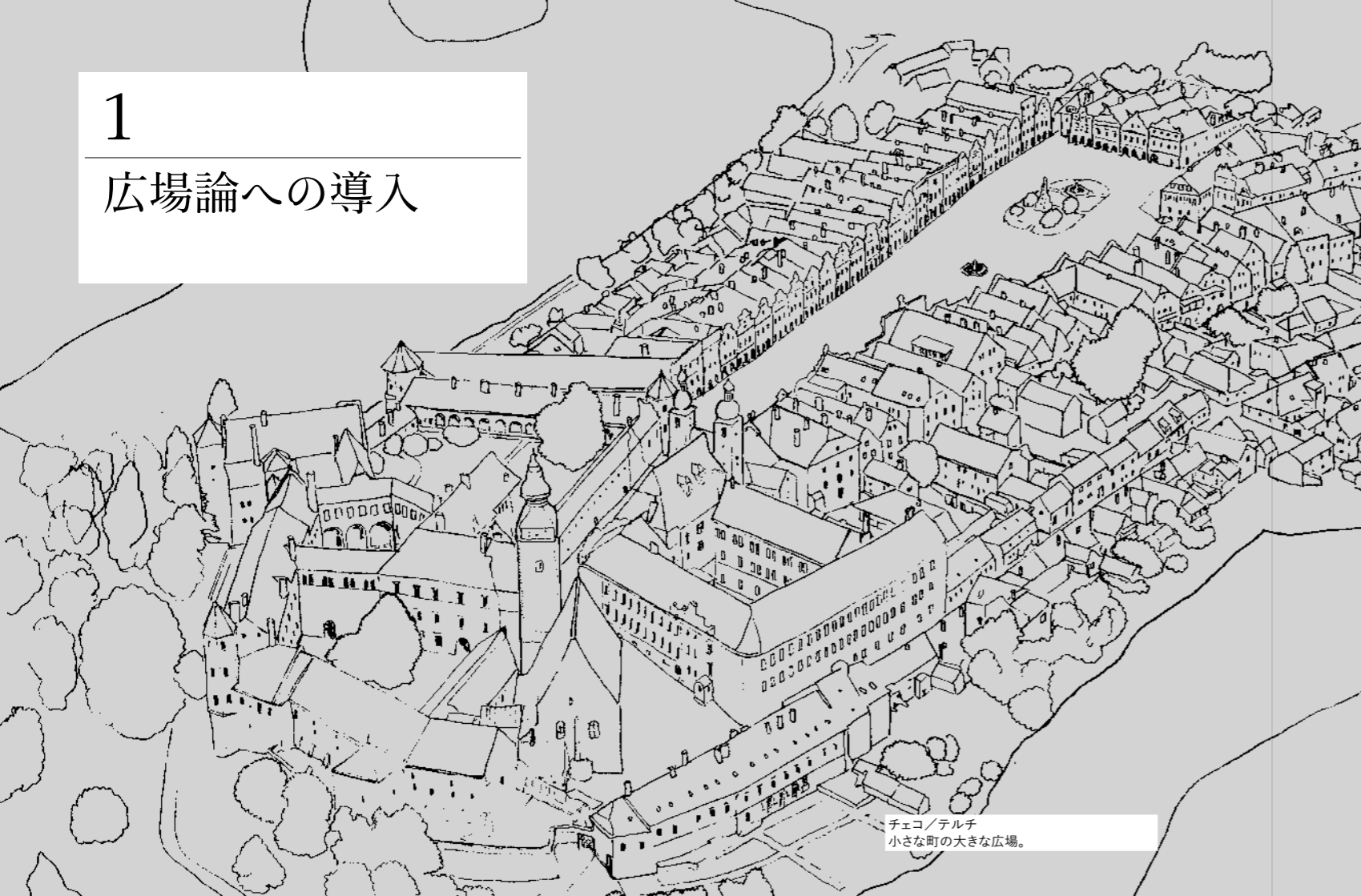
19 もうひとつの広場論 170

註釈等・参考文献 174

おわりに 177

1

広場論への導入



チェコ/テルチ
小さな町の大きな広場。

都市の屋外空間の中で広場としての空間が機能するのは、人間相互の交流が内包される場が生まれたときである。1対1の人の間の交流から、複数の人々との交流まで多様な交流が考えられる。比較的小規模な交流とは、家族・親族・友人同士の交流に始まって、徐々にその広がり示していくが、人間集団の規模が拡大するに従って交流の種類も多様化する。それは市場での商業活動であったり、冠婚葬祭の儀式であったり、祭りに発展する場合もあり、またそれがイデオロギーのぶつかり合いに展開することもあり、必ずしも良好な関係の場合だけでなく、人間集団同士の争いの場となったりもする。

広場とはこのような屋外空間での人間活動のすべてを内包する場として存在するものと考えられる。このように広場とは広がりのある、いわゆる広場らしい空間だけでなく、小規模な空間でも、人と人との交流できる空間が内包されれば広場と認定してみても良いと思われてくる。わが国にはヨーロッパのような広場の概念がないという通説が昔から言われてきたが、近年その考え方を見直す主張がいろいろなところで聞かれるようになってきた。

まず、いわゆる広場らしい広場とはどのような空間を指すも

のであろう。初めて海外旅行に出かけて体験したイタリアのミラノのドゥオーモ（大聖堂）広場やフィレンツェの花の聖母教会と洗礼堂の間にあるドゥオーモ広場や、ヴェネツィアのサン・マルコ広場などには、その規模だけでなく、整った設えと建築の美しさに圧倒されたものである。これら三つの広場には中心となる建物が位置づけられている。つまり、ミラノ大聖堂であり、フィレンツェの花の聖母教会であり、ヴェネツィアのサン・マルコ寺院である。もしこの三つの広場からこれらの建物を取り去ったとすると、意味のない空地の空間が残されるだけであろう。ミラノのドゥオーモ広場は19世紀の建築家ジュゼッペ・メンゴニにより、大聖堂を映えさせる空間としてデザインされた。ヴェネツィアのサン・マルコ広場は11世紀建造のサン・マルコ寺院の広場としてルネサンス期に整えられたとされている。フィレンツェのドゥオーモ広場については、いささか異なった状況にある。というのは、花の聖母教会とサン・ジョヴァンニ洗礼堂、ジョットの鐘楼の三つの建築構成で成り立っており、その建設の歴史が複雑なためである。花の聖母教



会は1296年に建設が始まり、最終的にファサードが完成するのは19世紀の1887年であり、それらの建設に携わった多くの建築家によって、初めて現在の姿が造り上げられたのである。広場の周りの建築を構成するというより中央部の建築を完成すること自体が広場を造り上げる過程であったといえるであろう。いずれにせよ、この三つの広場に共通の要素は、広場の中心となる建物がはっきりしていることであり、それがこれらの広場を特徴づける魅力となり、多くの人々の感動を呼び起こす結果となっているということであろう。

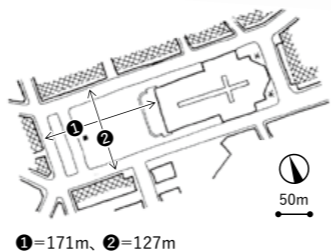
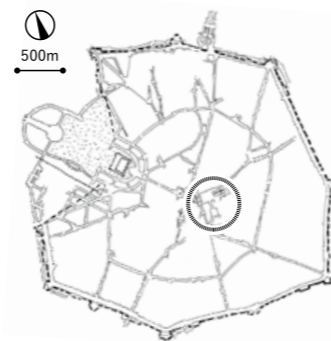
さて、広場の条件を考えてみると、まず、広がりのある空間が前提である。次に、この空間を特徴づける建物の要素が広場空間に存在していること。そして、広がりのある空間に人々が目的を持って集合してくることであろう。

第一の条件は通常都市の中に広場があるとして、都市の街路空間から広場空間が抽出できることが必要になるが、一般に街路空間は都市機能の中で流通機能を担う交通機関や人々が移動・行動する重要な場としての必要空間である。この空間に対して付加的に余剰の広がりのある空間の場合に、広場に対応する可能性がある。

第二の条件として建物には、広場空間の機能を誘導する力がある。それは宗教・行政・商業・文化等に関連し、その機能によって建物が広場空間の中で大きな意味を持ち、空間を

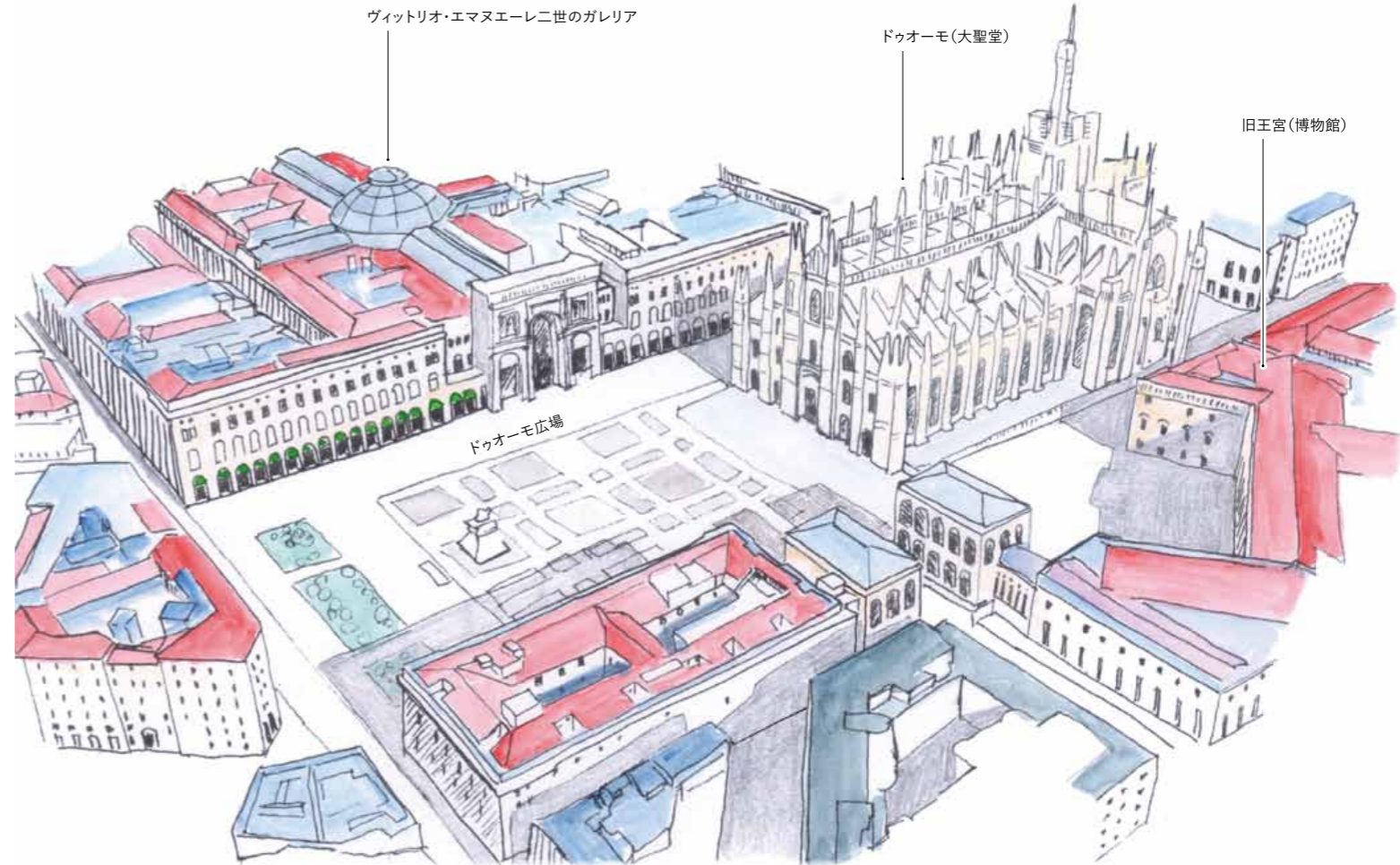
ミラノ／イタリア

ドゥオーモ広場



ミラノは北イタリアの中心として各都市をつなぐ道路網ができていると同時に、パヴィア運河などいくつかの運河も集まっている。ミラノの中心はドゥオーモ広場であるが、もうひとつの見所はミラノを支配したスフォルツァ家の城である。ミラノはイタリアの経済を支えている都市であると同時に、音楽におけるスカラ座、演劇でのピッコロ・テアトロなど、その他美術・芸術の世界でも他のイタリア都市と違った特色を示している。

ミラノの豆知識 ローマに次ぐイタリア第二の都市である。商業・工業・金融の中心である。ミラノ・コレクションで知られるように古来服飾・繊維などのファッション関連の産業で有名である。現代は工業も盛んでイタリア最大の経済の中心である。ミラノは中世ミラノ公国の時代に黄金時代となり、その繁栄は15世紀まで続いた。



2

建物のための広場と 人のための広場



チェコ/イチーン
市場広場の情景。

1975年まだ社会主義が東欧世界に確固としていた時期に初めて東欧の調査に参加した。ドイツでワーゲンのミニバスを購入して、まず入国したのがポーランドである。おそらく人々の監視の目が厳しいであろうと予想していたが、案の定、何の変哲もない農村集落で、屈強な体格の青年団に囲まれて、何をやっているのかと問い詰められた。また、3人でグループ行動をしていたユーゴスラビア(現在のボスニア・ヘルツェゴビナ)の山間の都市で、秘密警察に拘束されて2時間あまり尋問された。幸いなことに前日にベオグラードの日本大使館に寄って挨拶をしていたので助かったのかもしれないが、夜中に解放された。そこからベオグラードの空港にレンタカーを飛ばして、本隊に合流するためにブカレストの空港に飛んだ。こんな経験をしながら、社会主義の東欧とはこのような地域という印象を植えつけられた。

その最初に入国したポーランドで、それまでに見たり経験した広場と装いが異なる広場に遭遇することができた。帰国してから調べた結果、それらはポーランドの三大広場と呼ばれることがわかった。ポズナニ、ヴロツワフ、クラクフの3都市であ

る。西欧とひと味違った広場空間を感じて、これが東欧の一面なのかと思ったものである。

この経験があったので、1990年に海外都市広場調査を始めようと思立ったときに、何の迷いもなく東欧からと考えたのである。東欧には何か魅力があると感じたからである。それが一回目の海外都市広場調査であり、1990年9月のことであった。1975年の調査と大きく異なったことは、東欧が民主化されたことである。1989年にベルリンの壁が壊れ、東欧各国の人々の顔は新しい社会に対して希望に満ちて明るかったことを覚えている。

さて、ポーランドの三大広場の特徴を整理すると次のようになる。つまり、広場の中心となる建物施設が漠然としていること。全体の広場の形状は矩形を基本として、きわめて計画的に建設されていること。そして次のことが一番重要な要素である。矩形を中心に造られた広場であるが、その矩形を同時に見ることができない。というのは、広場の中央部分に建物施設が雑然と置かれているからである。それに加えて、都市全体として見ても、センターを構成する広場があるだけである。例えばイタ

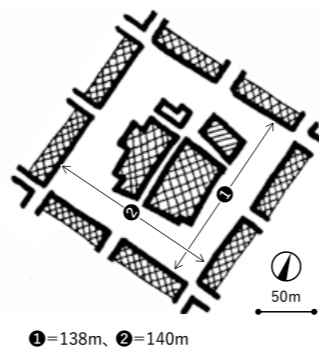
リアの広場ではセンターの広場があるだけでなく、機能が異なる別の広場が同じ都市領域に存在しており、特に小規模な広場群がそれらを支えている。これはポーランドの三大広場にはなく、中央の広場が単一的に都市のセンター機能を担っているのである。

私たちの調査では、都市にアプローチするとき「都市のセンターはどこかを問いながら進むやり方」を行ってきた。英語圏であれば center、ドイツ語圏では Zentrum、フランス語圏では centre ville、イタリア語圏では centro citta、スペイン語圏で centro ciudad などの標識を頼りに進むとセンターゾーンの広場に到達する。ポーランドの場合は centrum miasto である。ヨーロッパの場合はだいたいこの方式でアプローチ可能である。しかし、わが国の場合はこのような方法でアプローチすることは難しい。なぜなら都市のセンター意識が曖昧であるからである。ポーランドの場合は、はっきりとセンター広場が都市センターとして認識できる対象である。

「広場論への導入」で取り上げた三つの都市の広場（ミラノ、フィレンツェ、ヴェネツィア）には、その広場の中心となる建物施設がそれぞれにあり、それがその広場の中心的イメージをつくり上げている。そのような中心となる建物施設がポーランドの三大広場には欠けている。現在のクラクフに

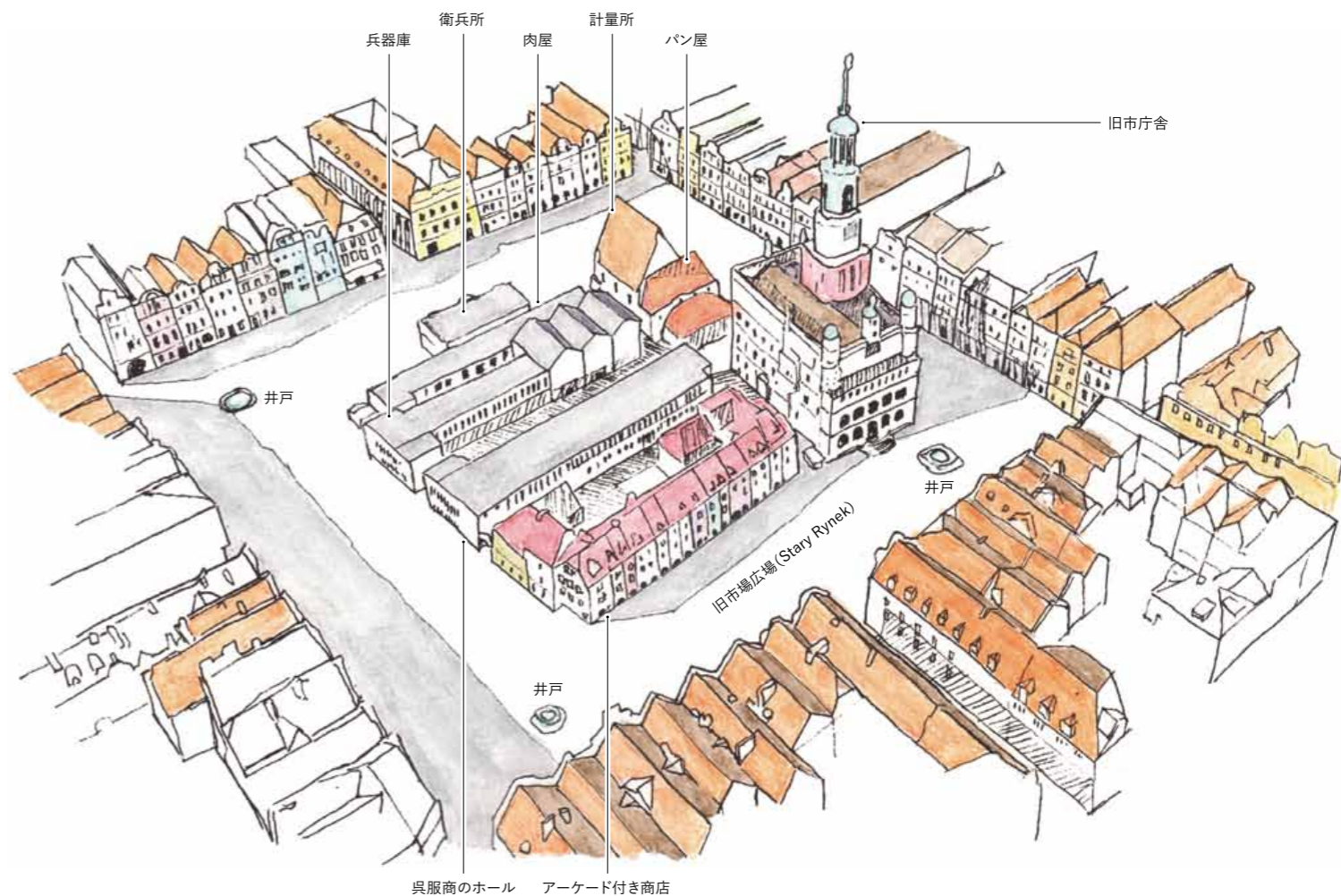
ポズナニ／ポーランド

旧市場広場



旧市場広場はポーランドで三番目に大きい広場で、旧市庁舎・商業施設が内蔵されている。商業施設は、かつては市場関連の計量所、衛兵所、兵器庫、呉服商のホール、肉屋、靴屋、パン屋などであった。旧市庁舎はルネサンス様式の建物で、からくり時計が毎日正午に時を知らせる。現在はポズナニ市歴史博物館となっている。

ポズナニの豆知識 ポーランド西部に位置する、ポーランド第五の都市。ベルリンとワルシャワの中間に位置する交通の要衝で、ヴィエルコポルスカ地方経済の中心地である。8世紀頃から城塞が築かれた、ポーランド最古の都市のひとつである。13世紀の中頃には都市の基礎が造られ、14世紀から16世紀には商工業都市として繁栄した。1793年からはプロイセン領となったが、1918年の蜂起で解放された。第二次世界大戦で町の大部分が破壊され、戦後復興した。

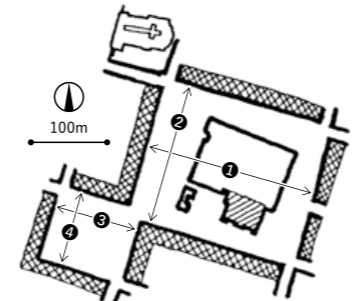
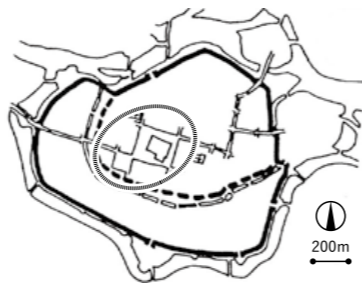


つについてはちょっと違うと異論を述べる方がいると思われるが、過去のクラクフの都市図を参照すると、旧市庁舎（現在は塔のみが残されて市庁舎本体は存在しない）が広場の中にあり、商業施設関連の計量所や警護所や、金持ちの商人の店、毛皮商の店などが雑然と四角い広場の中に埋め尽くされていたことがわかる（p.20）。また、聖マリア教会がクラクフの広場においてそのシンボリック的存在であることはわからないでもないが、実は広場の軸線とこの聖マリア教会の軸線が異なっており、教会建設と広場建設の時代的変遷の過程が窺える。しかし、広場が埋め尽くされた昔の状況から考えると、ポズナニ、ヴロツワフと同じような概念で計画されたことがわかるのである。

さて、三つの都市の広場名称の共通部分はルネク（rynek）という言葉である。この意味は市場広場である。ポズナニとヴロツワフの場合はこれにスターリ（stary）が頭につき旧市場広場の意味になる。クラクフだけはルネク・グワヴヌイ（Rynek Główny）となり、主要な、高順位の意味が加わる。いずれにせよ、これらの広場の建設時の意味は市が立つ広場である。そのための諸施設が広場内に配置され、どれひとつをとっても、それがその広場のイメージを形成するものには至っていない。つまり、どの建物をとってそれは広場のイメージをつくり上げるものではなく、「市が立つ」

ヴロツワフ／ポーランド

旧市場広場



旧市場広場には旧市庁舎と商業施設が内蔵されている。現在商業施設である部分は、かつての呉服商ホール、守衛隊詰所、店舗、魚のマーケットなどであった。旧市庁舎は14世紀末から15世紀初頭にかけて建てられた、ゴシックとルネサンスの建物で、現在は市立美術館として公開されている。旧市場広場の南西には、塩の広場が続く。ここはかつて塩の取りきがされていた場所である。

①=211m、②=175m、
③=104m、④=88m

ヴロツワフの豆知識 ポーランド西部に位置する、ポーランド第四の都市。シロンスク地方の中心都市として文化・経済ともに栄えてきた。町はオドラ川の両岸に広がっており、川には12の島、それらを結ぶ100本以上の橋がある。6世紀にスラブ人の集落が存在したといわれる。10世紀頃に城塞ができ、12世紀からは学問・芸術活動が盛んになり、商業・織物業も発達した。第二次世界大戦で町の大部分が破壊されたが、戦後復興した。

